

# トルコ語指示詞における非文脈指示用法の再検討\*

バルプナル、メティン\*\*

キーワード： トルコ語 指示詞 非文脈指示用法 話し手の空間  
聞き手による認識

## 要旨

バルプナル(2010b)では「共通の空間」及び「聞き手による認識」と言う2つの観点から、トルコ語指示詞の指示用法の分布を検討した。本稿では、この2つの概念のうち「共通の空間」と言う概念では十分に捉えることのできないトルコ語指示詞の現象が存在することを指摘し、それらの現象を説明するためには「話し手の空間」と言う概念が有効であることを主張する。本稿で分析・主張する論点は次の通りである。(1) *bu*、*şu* は「話し手の空間」にある対象を指示するのに用いられるのに対し、*o* は「話し手の空間」にない対象を指示するのに用いられる。(2) *şu* 系列指示詞に見られる指示対象に対する話し手の側の共感性/共有性の含意は「話し手の空間」の特性の一つである「指差し」と言う指示行為から導き出される帰結の一つである。

## 1. はじめに

トルコ語には、近称(*bu*)、中称(*şu*)、遠称(*o*)と呼ばれる3系列の指示詞がある(表1)。

表1 トルコ語の指示詞<sup>1</sup>

	<b>bu-</b>	<b>şu-</b>	<b>o-</b>	
モノ・人・事柄	<i>bu</i>	<i>şu</i>	<i>o</i>	-
位置・方向	<i>bura/burası</i>	<i>şura/şurası</i>	<i>ora/orası</i>	<b>-ra, -rası</b>
様態	<i>böyle/bunca</i>	<i>şöyle/şunca</i>	<i>öyle/onca</i>	<b>-(y)le, -(n)ca</b>

従来、これらの指示詞は指示詞語幹 *bu-*、*şu-*、*o-* からの派生語とされており、*bu/böyle/bunca*、*şu/şöyle/şunca*、*o/öyle/onca* は名詞句の前に置かれてその名詞句の意味を限定する形式、いわゆる指示形容詞として用いられ、*bu/bura/burası*、*şu/şura/şurası*、*o/ora/orası* はモノや人又は事柄を表す指示代名詞として用いられる。

本稿では、トルコ語指示詞の(非文脈)指示用法に関してバルプナル(2010b)の中で提案されている「共通の空間 (shared space)」と言う概念では十分に捉えることのできないトルコ語指示詞

\* この原稿の完成に当たっては、匿名の査読者のかたにコメントを頂きました。深くお礼を申し上げます。

\*\* Mehmet Akif Ersoy University, Faculty of Arts and Sciences, Eastern Languages and Literatures Department, Burdur/TURKEY.

<sup>1</sup> 表1は、バルプナル(2010b:9)による主張を筆者が整理し直したものである。

の現象が存在することを指摘し、それらの現象を説明するためには「話し手の空間 (speaker's space)」（及び「聞き手による認識 (recognition by the hearer)」）と言う概念が有効であると主張する。以下に、トルコ語指示詞の先行研究を見ていく。

## 2. トルコ語指示詞の先行研究

現代トルコ語指示詞における最近の研究では、bu、şu、o の様々な用法を伝統的な文法概念(指示対象が話し手に近いか遠いか(Banguoğlu 2004、Ergin 2002、飯沼 1995、Lewis 1967)、指示対象が話し手に近いか聞き手に近いか第 3 者に近いか(Kissling 1960)、指示対象が見えるかどうか(Jansky 1943、Peters 1947)等)ではなく、独自の概念を導入し、新しい観点から説明しようとする研究が見られる。その中で、最も興味深い分析がなされている研究としては林(1985、1989)、西岡(2006)、バルプナル(2010b、2011、2012)が挙げられる。

林(1985、1989)はbuとoに関しては話し手に近い(空間的・時間的・心理的)対象をbu、話し手から離れている対象をoで指示すると考え、buとoの区別に関してあまり興味深い問題はないとし、主にşuを中心にトルコ語指示詞の用法を検討している。更に林は、「(聞き手が)対象に既に気付いているかどうか」と言うことをbu、şu、oを使い分ける基準として用いることを提案している。そこでは、「聞き手が対象に既に気付いている」と話し手が見做している場合bu/oを、「聞き手が対象にまだ気付いていない」と話し手が見做している場合şuを用いると言う。そして、『「対象に既に気付いているかどうか」と言う点を「ディスコース(対話者たちがお互いに共有していると思込んでいる場面及び文脈に関する知識)に既に対象が導入されているかどうか」と言い換えることにより、ダイクシスだけではなく文脈指示にも同様の基準が適用できると考えられる(林1985:57)』としている<sup>2</sup>。

西岡(2006)は、ウズベキ語・カザフ語・新ウイグル語・トルコ語・アゼルバイジャン語の指示詞を扱った研究である。西岡は、a) 発話現場において指示対象が知覚可能か否か、b) 談話内で当該の指示詞より前に、同一の指示対象を表す言語表現(先行言語表現)が必要か否か、と言う2つの基準を設け、指示詞用法をまず a の基準に基づいて現場指示用法(発話現場において知覚できるもの(可視のもの)指示する用法)と非現場指示用法(発話現場において知覚できないもの(不可視のもの)指示する用法)とに分ける。又、b の基準に基づいて非現場指示用法を更に独立指示用法(言語表現によって談話に導入された要素と同一指示となる必要がない指示用法)と非独立指示用法(言語表現によって談話に導入された要素と義務的に同一指示となる指示用法)に分類し、そしてトルコ語指示詞について次のような結論に辿り付いている。現場指示用法の場合、トルコ語の指示詞bu(近称)及びo(遠称)は(談話へ)導入済みの要素を指示するために用いるのに対し、şu(近称/遠称)は要素を談話へ新規に導入するために用いる<sup>3</sup>。又、非現場指示用法の場合、独立指示用法におけるşuは要素を談話へ新規に導入するのに用いられ、非独立

<sup>2</sup> 林(1985)では「ダイクシス」と「文脈指示」と言う概念が用いられているが、トルコ語指示詞の指示用法が「ダイクシス」と「文脈指示」に分割され、検討されているわけではない。

<sup>3</sup> 基本的なアイデアは林(1985、1989)によるものである。

指示用法におけるbuは話し手自身の直前の発話内の構成素又は対話相手の発話全体を指示 (textual deixis) し、oは話し手自身の直前の発話内の構成素又は対話相手の発話内の構成素を指示する<sup>4</sup>。

以上、トルコ語指示詞における林(1985、1989)及び西岡(2006)の研究をまとめた。しかし、その中で提案されている考え方ではまだ十分に説明することのできないトルコ語指示詞の現象が存在しているとバルプナル(2010b、2011、2012)が指摘しており、それらの現象を説明するに当たって、「共通の空間」、「言語テキスト化」、「管理可能な領域」、「文照応形」、「名詞句照応形」等の概念を導入し、従来の研究・解釈とは全く異なる観点からbu、şu、oの用法を検討する必要があると言う<sup>5</sup>。そうすることによって、これまで例外とされてきたトルコ語指示詞のデータや注目されてこなかったトルコ語指示詞に関する様々な現象をうまく説明することができ、かつ従来様々に論じられてきたbu、şu、oの分布に関する多様な提案に対して統一的・原理的な説明を与えることが可能になると言う。以下に、便宜上バルプナル(2010b、2011、2012)の研究をバルプナル(2010b)、バルプナル(2012)、バルプナル(2011)の順で見えていくことにする。

バルプナル(2010b)は、bu、şu、oの(非文脈指示)用法を「共通の空間」及び「聞き手による認識」と言う2つの観点から素性分析の手法による交差分類を用いて検討する。その結果、bu、şu、oの用法に関しては次の結論が導き出されると言う。(i)「共通の空間」の対象を指示するbu、şu系列指示詞とは異なり、o系列指示詞は「非共通空間」の対象を指示する指示詞である。(ii) o系列指示詞は聞き手が対象に気付いていると話し手が判断する場合(表2のo<sub>1</sub>の場合)だけでなく、聞き手が対象に気付いていないと話し手が判断する場合(表2のo<sub>2</sub>の場合)にも用いられる点で、bu、şu系列指示詞とは異なる分布を示している(buは聞き手が指示対象に気付いていると話し手が判断した場合に、şuは聞き手が指示対象に気付いていないと話し手が判断した場合に用いられる)<sup>6</sup>。(iii) o系列指示詞はその使用に当って、o<sub>1</sub>、o<sub>2</sub>共に(指さし等の直示的指

<sup>4</sup> 西岡(2006)は「話し手自身の直前の発話内の構成素を指示」するのに用いられる bu、o の使い分けについては言及していない。

<sup>5</sup> 林(1985、1989)及び西岡(2006)の中心的な問題としては a) bu/o の特性群をただ個々に記述するだけでなく、何故そのような特性群(cluster)が観察されるのかと言うことをどのように説明するか、b) 新規導入形式として şu が用いられるとされているが、何故 bu や o ではなく şu だけが無条件で導入用法の指示詞として選択されるのかについて説明が与えられていない等の点が挙げられる。更に、林(1985、1989)に関して、bu/o の分布の決定条件としての「空間的又は心理的距離」条件の持つ大きな問題点の一つは、条件が(A or B という)離接的(disjunctive)な形式で述べられている点にあると考えられる。離接形式の条件は同一の事柄を、A を用いても B を用いても予測できる場合が多くその意味で不必要な余剰性(redundancy)を持ち、正しい一般性を捉えていないからである。更に、西岡(2006)の中心的な問題点は指示詞の用法を現場指示用法と非現場指示用法に大別して考えている点にある。こうした分類では現場指示用法の独立指示用法と非独立指示用法が全く記述できないか、又は記述できたとしても非現場指示用法との不必要な重複性を避けることはできないだろうと言える。

<sup>6</sup> 「共通の空間」とは、話し手が聞き手との「一様性(指示対象が話し手にも聞き手にも一様に近い或いは一様に遠いと言う条件)」に基づいて判断する共有可能な空間のことである。又、「聞き手による認識」とは聞き手が指示対象の存在に気付いているかどうかと言う話し手による判断である。具体的には、次の(i)の例では指示対象(山)は話し手からも聞き手からも遠く離れており、(ii)では指示対象(写真)は両者のすぐ目の前のところにある。従って、(i)の山は話し手にも聞き手にも一様に遠い(と話し手が判断する)空間にある対象、(ii)の写真は話し手にも聞き手にも一様に近い(と話し手が判断する)空間にある対象として見ることができる(このような場合、話し手は自分と聞き手との間で指示対象に対する一種の心理的一体感を作り出すことができ、話し手と聞き手との間でその指示対象に関する言語的情報を共有することができるようになるとバルプナル(2010b)が考えている。)。又、これらの例は聞き手が指示対象の存在に気付いていない(と話し手が判断した)

示動作とは異なる)非直示的な限定要件を伴って使用される直示性の弱い指示詞である。(iv) o 系列指示詞にはşu (又はbu)系列指示詞の場合に感じられる対象に対する話し手の側の共感性/共有性の含意が見られない。(v) o系列指示詞は特定不可能な対象を非直示的に指示できる点で bu、şu系列指示詞とは異なっている。更に上記特徴(iii)-(v)は、o系列指示詞が「非共通空間」の指示詞であるとする(i)の特徴の帰結である。

バルプナルは以上の考察を交差分類表に次のようにまとめている(表2)。

表2 現代トルコ語における(言語テキスト生成時の)指示詞の体系<sup>7</sup>

	共通の空間	+	-
聞き手による認識			
+		<i>bu</i>	<i>o</i> <sub>1</sub>
-		<i>şu</i>	<i>o</i> <sub>2</sub>

バルプナル(2010b:17)

バルプナル(2012)は、現代トルコ語指示詞のデータの中にはバルプナル(2010b)で検討した「共通の空間」や「聞き手による認識」と言う概念では十分に説明することができない現象が存在することを指摘し、これらの現象を説明するためには(i)トルコ語指示詞の指示用法を「指示対象が先行発話文脈内で言語テキスト化されているか否か(言語テキストとして顕在化しているか否か)」と言う観点から、「非文脈指示用法(先行発話文脈内で言語テキスト化されていない対象を指示する用法)」及び「文脈指示用法(先行発話文脈内で言語テキスト化されている対象を指示する用法)」に分けて考える必要があると言う。又、バルプナル(2012)で主張される論点は次の通りである。(ii)文脈指示用法においては従来言われてきた「話し手と指示対象の相対的距離」と言う現場指示性に強く依存する概念ではなく「管理可能な領域(controllable domain)」と言う(現場指示性から独立して定義できる)概念が、非文脈指示用法においては「共

場合に相当するのだから、バルプナル(2010b)の仮説((i)及び(ii)の帰結)では(i)-(ii)の例においてşuが選択されることが正しく予測される。

(i) (両者が遠く離れている場面で、話し手は遠くにある山を指して聞き手<Ahmet>に)

Ahmet, { \*bu/şu/\*?o } dağ-a bak!  
 アフメット あの 山-与格 見ろ  
 アフメット、あの山を見ろ!

(ii) (同じテーブルで聞き手と話している場面で、話し手はそのテーブルの上にある一枚の写真を聞き手<Ahmet>に示して)

Ahmet, { \*bu/şu/\*o } fotoğraf-a bak!  
 アフメット この 写真-与格 見ろ  
 アフメット、この写真を見ろ! (Balpınar 2010a:194)

<sup>7</sup> 「共通の空間」及び「聞き手による認識」をそれぞれ正と負の値を持つ素性として分析するなら、「非共通の空間」の指示詞であるトルコ語指示詞oは、表2のように分布していると考えられることになる。この場合、oは形態的同一性を持つ2つの異なる指示詞o<sub>1</sub>とo<sub>2</sub>として見る事ができる。

通の空間」及び「聞き手による認識」と言う概念が、それぞれ中心的な役割を担う。(iii) 文脈指示用法においては「現場指示・非現場指示」と言う区別は指示詞の分布決定と本質的な関連性を持たない(irrelevant)概念であると指摘している<sup>8</sup>。

バルプナル(2011)は、バルプナル(2012)で提案されている考え方からだけではまだ十分に説明することができないトルコ語指示詞のデータが存在することを指摘し、それらのデータを説明するためには、(i)「先行発話文脈中の名詞表現又は類似名詞表現が繰り返し用いられている(非照応用法)か否(照応用法)か」が重要な役割を果たしていると言う。その中で分析・主張する論点は次の通りである。(ii) 先行発話文脈中の名詞表現又は類似名詞表現の繰り返し・省略を伴わないbu/oの文脈指示用法(照応用法)ではbu/oはいずれも文を先行詞とする「文照応形(sentence anaphor)」としての用法を持つ。(iii) 同じ文要素であっても、oは「開放文(open sentence)」を、buは「非開放文(non-open sentence)」を指示するのに用いられる。(iv) bu/oが照応用法として用いられる場合、現代トルコ語では指示詞oは文及び名詞句を先行詞とする文照応形(sentence anaphor)、名詞句照応形(NP anaphor)として用いることができるのに対し、指示詞buは文照応形としてしか用いることができない。(v) oには「文照応形」の他に「名詞句照応形」の用法も存在すると言う特徴は「oは開放文を先行詞とする文照応形である」とする上記(iv)の特徴から導き出すことのできる帰結の一つである。(vi) バルプナル(2012)の「文脈指示用法(text dependent use)」対「非文脈指示用法(non-text dependent use)」と言う区分けに加え、文脈指示用法を更に「非照応用法(non-anaphoric use)」と「照応用法(anaphoric use)」とに分けて考える必要がある。

### 3. トルコ語指示詞の非文脈指示用法の再検討

前節ではトルコ語指示詞に関する諸研究・解釈をまとめた。その中で、バルプナル(2010b、2012)では、非文脈指示用法のbu、şu、oの分布は「共通の空間」及び「聞き手による認識」と言う概念に基づいて決定されるものであることを見てきた。本節では、非文脈指示用法の指示詞の分布を決定する上で、これらの2つの概念のうち「共通の空間」と言う概念では十分に捉えることができないデータが存在することを指摘し、それらのデータを説明するためには「話し手の空間」と言う概念が有効であることを主張する。

#### 3.1 「話し手の空間」とbu・şuの非文脈指示用法

本節では、指示対象が先行発話文脈中に言語テキスト化されていない場合に用いられるbu、şuの非文脈指示用法について述べる。以下では、便宜上先ずşuの用法から見ていく。

<sup>8</sup> 「言語テキスト化」とは、「先行発話文脈への指示対象(新規)導入」のことである。以下では、便宜上「先行発話文脈中への指示対象(新規)導入」と言う表現の繰り返しを避けるために、「言語テキスト化」と言う表現を用いることにする。又、本稿で言う「発話文脈」とは、「発話者が音声又は一定の書記法を用いて表出した(言語)テキスト」のことである。

(1) (巻き終わった毛糸玉を手元に置いて他の作業をしている聞き手に向かって話し手が呼びかける)

{\*bu/şu/\*o} yan-in-daki yumağ-ı ver-ir  
 その 手-2 人称単数-連体化 毛糸玉-対格 与える-アオリスト  
 mi-sin?  
 疑問形-2 人称単数  
 そばにあるその毛糸玉を(こちらに)渡してくれる? (西岡 2006:63-64(改変))

(1)の şu は、先行発話文脈内に指示対象(毛糸玉)が言語表現として導入されていない場合に用いられる「非文脈指示用法」の şu である。従って、バルプナル(2010b)の仮説では şu の選択は指示対象が「共通の空間」にあり、かつ「聞き手による認識」がないとの話し手の判断に基づいていることになる(注6参照)。バルプナル(2010b)では「共通の空間」の定義の一部として「一様性」の条件(指示対象が話し手にも聞き手にも一様に近い或いは一様に遠いと言う条件)を導入したが、(1)の場合、指示対象(毛糸玉)は聞き手に一方的に近い(聞き手との「一様性」を持たない)「非一様」な空間にあると言わざるを得ない。それにもかかわらず、話し手が対象(毛糸玉)を「共通の空間」にあると判断して şu を用いるのは何故だろうか? (1)と(1)'の場面の違いに注意していただきたい。

(1)' (話し手が、話し手の関心に気付かぬまま自分(聞き手)の手元の毛糸玉を眺めている聞き手に向かって)

{\*bu/\*şu/o} el-in-deki yumağ-ı ver-ir  
 その 手-2 人称単数-連体化 毛糸玉-対格 与える-アオリスト  
 mi-sin?  
 疑問形-2 人称単数  
 手元にあるその毛糸玉を(こちらに)渡してくれる?

(1)'の o も、(1)の şu と同じく、指示対象(毛糸玉)を先行発話文脈中に言語テキスト化する場合に用いられる o の(非文脈指示)用法である。(1)'と(1)の決定的な違いは、話し手の発話時点で、指示対象(毛糸玉)の存在する空間は聞き手の一方的な関心によって話し手に対して閉ざされているか否かである。(1)'では聞き手が聞き手自身の支配する空間内の対象(毛糸玉)に向けられた話し手による関心に気付いておらず、従って話し手にとって対象(毛糸玉)は「聞き手の関心が一方的に支配している空間」に存在するのに対し、(1)では(他の作業をしている)聞き手の関心が対象(毛糸玉)に向けられていないため、話し手にとって対象(毛糸玉)は「聞き手の関心が一方的に支配している空間」に存在しないと考えることができる。言い換えれば、指示対象(毛糸玉)の存在する空間は、(1)'の場合聞き手の認識状態により閉ざされた(つまり話し手による指示対象への自由なアクセス(利用)が妨げられている)空間であり、(1)の場合話し手

に開かれた(つまり話し手による指示対象への自由なアクセス(利用)が妨げられていない)空間であると考えられることができるということである。

以上のように考えるならば、次の(1)"の場合にも、(PC ゲームに熱中している)聞き手は、転がってきた毛糸玉の存在にそもそも気付いていないのだから、指示対象(毛糸玉)の存在する空間は、聞き手の関心が一方的に支配する空間とは考えられず、その意味で、話し手の自由なアクセス(利用)が制限されていない空間として考えることができる。

(1)"(話し手はPC ゲームに熱中している聞き手の背後から呼びかけ、聞き手の直ぐそばに転がっていった毛糸玉を拾って渡すように頼んでいる場面である)

{\*bu/şu/\*o} yumağ-ı ver-ir mi-sin?

その 毛糸玉-対格 与える-アオリスト 疑問形-2人称単数

その毛糸玉を(こちらに)渡してくれる? (西岡 2006:63-64(改変))

以上のような観察から我々は、(非文脈指示用法の)şuで指示される対象(毛糸玉)の存在する空間は、「話し手による自由なアクセス(利用)が制限されておらず、従って話し手による(指示対象にかかわる)円滑な指示行為の遂行が制限されていない空間」であることが分かる<sup>9</sup>。この考察が基本的に正しいと言うことは、前節の(注)6で見た(i)-(ii)の例からも窺うことができる。

(2) (= 注6の(i)-(ii)の例)

a. (両者が遠く離れている場面で、話し手は遠くにある山を指して聞き手<Ahmet>に)

Ahmet, {\*bu/şu/\*?o} dağ-a bak!

アフメット あの 山-与格 見ろ

アフメット、あの山を見ろ!

b. (同じテーブルで聞き手と話している場面で、話し手はそのテーブルの上にある一枚の写真を聞き手<Ahmet>に示して)

Ahmet, {\*bu/şu/\*o} fotoğraf-a bak!

アフメット この 写真-与格 見ろ

アフメット、この写真を見ろ! (Balpınar 2010a:194)

上で見た(1)"と同じく(2)では、指示対象((2a)では山、(2b)では写真)の存在する空間は、聞き手の一方的な関心によって話し手に対して閉ざされていないのだから、話し手による円滑な指示行為の遂行が制限されていない空間(i. e. 話し手による自由なアクセス(利用)が制限され

<sup>9</sup> (1)-(1)"のようなデータから、非文脈指示用法の指示詞 o(o<sub>1</sub>)で指示される対象(毛糸玉)の存在する空間に関しては、(毛糸玉は聞き手の一方的な関心によって支配されているのだから)話し手による自由なアクセス(利用)が制限されており、従って話し手による指示対象にかかわる円滑な指示行為の遂行が制限されている空間であることが分かる。そのことについては3.2節で詳しく論じることにする。

ていない空間)であると考えることができる。

このように考えた場合、非文脈指示用法の  $\text{\textcircled{S}}$  のデータは、バルプナル(2010b)で論じた「共通の空間」の定義の一部である「一様性」の条件を用いなくても、上で述べた「話し手による自由なアクセス」条件だけを用いて説明することが可能になるだろう。言い方を変えれば、「話し手による指示対象にかかわる指示行為の円滑の遂行」を保証するために、(一様性の条件ではなく)話し手による自由なアクセスの可能性を「共通の空間」の構成のための重要な概念として考えていると言うことである。従って、「共通の空間」を以下のように定義することができる。

- (3) 「共通の空間」：話し手による自由なアクセス(利用)が制限されておらず、従って話し手による指示対象にかかわる円滑な指示行為の遂行が期待できる空間<sup>10</sup>。

「共通の空間」を(3)のように捉えるならば、上で見た(1)、(1)'、(2)の $\text{\textcircled{S}}$ の指示対象((1)及び(1)'では毛糸玉、(2a)では山、(2b)では写真)は話し手にとって「共通の空間」にあると考えることができる<sup>11</sup>。又、これらの例では指示対象は聞き手がその存在に気付いていない(と話し手が判断する)場合に相当するのだから、これらの場合バルプナル(2010b)で述べた(i)及び(i i)の帰結により $\text{\textcircled{S}}$ が容認されることになる。この観察が基本的に正しいと言うことは、次の(4)-(6)の例からも窺うことができる。

- (4) (話し手が隣にいる聞き手に時計コレクションを見せる場面である。話し手は聞き手の目の前で腕時計を3個鞆から取り出し、直ぐ手前にあるテーブルの上に置いてから、一つずつその時計を指しながら)

{bu/\*\textcircled{S}/\*o}-nu İsviçre-den, {bu/\*\textcircled{S}/\*o}-nu Japonya-dan,

これ-対格 スイス-奪格 これ-対格 日本-奪格

{bu/\*\textcircled{S}/\*o}-nu da geçen sene İtalya-dan

これ-対格 も 去年 イタリア-奪格

al-di-m.

買う-過去形-1人称単数

これをスイスで、これを日本で、そしてこれを去年イタリアで

買いました。

(バルプナル 2010b:15)

<sup>10</sup> この定義に関する基本的なアイデアはバルプナル(2012:99(注13))によるものである。バルプナル(2012)では筆者は「共通の空間」の決定条件として「一様性」の条件に加えて、「話し手による円滑な指示行為の遂行」条件をも用いていたが、本稿では「話し手による円滑な指示行為の遂行」条件のみが非文脈指示用法の指示詞の分布において重要な役割を果たしていると理解している。

<sup>11</sup> このように考えた場合、「非共通の空間」は「話し手による自由なアクセス(利用)が妨げられており、従って話し手による指示対象にかかわる円滑な指示行為の遂行が期待できない空間」と定義できることになる。そのような空間の一つの例としては、本文例(1)'で見たような「聞き手の関心だけが一方的に支配している空間」を挙げるることができる(注9参照)。同様に、話し手による自由なアクセスが制限される空間のもう一つの例としては次節で見る本文例(15)の場合のような、話し手による対象へのアクセスが距離的に制限されていると話し手が判断する場合を挙げるることができる。詳しくは3.2節で述べる。



- (5) (話し手は観光で来たところで周りの景色を見ながら、隣にいる聞き手に)

Ne ilginç ülke {burası/\*şurası/\*orası}.

何 面白い 国 ここ

ここは何て面白い国だ! (Öğüt 2004:278)

- (6) (登山の場面で、話し手と聞き手が山の頂上に到着し、目の前に広がる美しい景色に気付く。

しばらく二人でその美しい風景を見て、話し手は隣の聞き手に)

{bu/\*şu/\*o} manzara-yı görmek herkes-e

この 景色-対格 見ること みんな-与格

nasip ol-maz.

機会がある-否定形

このような絶景は誰にでも見れるものではない。(バルプナル 2010b:15)

(4)-(6)では、指示対象((4)では時計、(5)では空間全体、(6)では景色)は「話し手による円滑な指示行為の遂行が制限されていない(i. e. 話し手による指示対象への自由なアクセスが制限されていない空間(共通の空間)」に存在し、かつ聞き手が既にその対象の存在に気付いていると話し手が判断する場合に相当するのだから、(4)-(6)ではbuが選択されることが正しく予測される。

なお、「共通の空間」の定義を(3)のように変更した場合、考慮すべき事柄は、(3)の空間概念を「共通の空間」と称することができるかということである。バルプナル(2010b)で我々は、「一様性」の条件を用いて「共通の空間」を定義したが、上述したように a) 非文脈指示用法の指示詞のデータは「一様性」の条件を用いなくても「話し手による自由なアクセス」条件だけを用いて説明することができること、b) (3)の定義から我々は「共通の空間」概念は「自由なアクセス」や「円滑な指示行為の遂行」に基づいて発話者(話し手)の判断によって構成される概念であることを見てきた。これらのことから、(3)の「共通の空間」概念は次のように再呼称できると考えても差し支えない。

- (3)'「話し手の空間」：話し手による自由なアクセス(利用)が制限されておらず、従って話し手による指示対象にかかわる円滑な指示行為の遂行が期待できる空間。

(3)'の考え方が基本的に正しいならば、(1)、(1)'、(2)の şu の指示対象、そして(4)-(6)の bu の指示対象は話し手から見て「話し手の空間」にあると言うことができる。このように考えた場合、「話し手の空間」の原則を次のように定義できるだろう。

- (7)「話し手の空間」の原則：指示対象が「話し手の空間」に存在する場合、「聞き手がその存在に気付いていない」と話し手が判断した指示対象は şu で指示



心理的な共感性/共有性をも(場合によっては)同時に作り出すことができると考えられる<sup>12</sup>。このように考えることによって筆者は「一様性」と言う概念を利用しなくても、「話し手の空間」と言う概念及び「話し手の空間」の指示詞が持つとされる心理的一体感は説明可能であると考えている。

なお、非文脈指示用法のşuは、観念上の対象を指示するのにも用いられる。次の用例をご覧ください。

(9) (話し手は聞き手とヤークップと言う男について話し合った直後、隣にいる部下に次のように命令を下す)

Git {\*bu/şu/\*o} Efraim-e bir soruşturma bu Yakup  
 行け(命令形) あの エフライム-与格 一 たずねる この ヤークップ  
 de-n-en adam-ı  
 言う-受身形-連体形 男-対格

あのエフライムのところに行って、このヤークップと言う男のことをちょっと訊いてみる。

Eldem (2004:65)

(9)のşuは先行発話文脈内に言語表現として導入されていない対象(Efraimと言う人物)を指示するのに用いられる(非文脈指示用法の)şuである。又、このşuは本節でこれまで見てきたşuの例と異なり、発話現場に存在しておらず、かつ話し手も聞き手も知っている(と話し手が判断した)対象を指示するのに用いられる。このように、一見特殊の状況であるかのように見えるşuの用法でもその背後に(7)で述べた原則が働いていると考えることができる。(9)では、Efraimは話し手と部下との共通の親友である。この場合、話し手は発話現場に存在しないEfraimのことを急に思い出し、その人物を部下にşuを用いて指示している。このような場合、Efraimは対話者達がお互いに共有していると思い込んでいる人物であり、話し手(及びその部下)とごく親しい間柄であるので、話し手による指示対象(Efraim)への観念上のアクセス(利用)が制限されていないと考えることができる。従って、指示対象(Efraim)は話し手による円滑な指示行為の遂行が妨げられていない空間(話し手の空間)にあると言える。又、「聞き手による認識」と言う観点から見た場合、Efraimは聞き手の意識に上っていない対象として考えることができる。何故ならば、(9)の文が発話される前の段階でEfraimが対話者たちの間で話題にされていないからである。従って、(9)では聞き手がまだEfraimの存在に気付いていないと考えることができる。この考え方が正しいならば、(9)では(7)の原則によりşuが容認されるはずである。実際に、この例ではşuが用いられるのである。又、話し手の心理的状況から(9)の例を見た場合、話し手は

<sup>12</sup> こうした指差しの機能を利用した指示対象に対する「共有感」の達成は非「話し手の空間」(話し手による自由なアクセスが妨げられており、従って話し手による指示対象にかかわる円滑な指示行為の遂行が期待できない空間)の指示詞oには期待することができない働きである。何故なら、前節で述べたように、非文脈指示用法のoは原則的に指差し等の直示的指示方法を伴うことができないからである。

şuを用いることによって自分と聞き手との間で指示対象に対する一種の心理的一体感を作り出すことができる。従って、話し手はşuを用いた場合、指示対象(Efraim)が最初から「話し手の空間」にあると考えることができる。この例において注意すべきことは、şuの使用に当たっては指差し等の直示的・非言語的指示方法を用いることができないと言う点である<sup>13</sup>。この予測が正しいと言うことは、(9)のşuが指差し等の直示的指示方法と共に用いられた場合、その使用が極めて不適切なものになってしまうことから見てとることができる<sup>14</sup>。

(9)のようなデータの観察から我々は、発話現場に存在しない観念上の対象を指示するのに用いられるşuの用法(非文脈指示用法)に関しては、(ア) 指示対象が発話現場に存在する場合((1)、(1)"、(2)、(8)の場合)だけでなく指示対象が発話現場に存在しない場合((9)のような場合)にも用いられる、(イ) 指示対象が発話現場に存在するか否かを問わず、一律に「話し手の空間」及び「聞き手による認識」概念に従ってその分布が決定される、(ウ) (9)のşuは、(1)、(1)"、(2)、(8)のşuと異なり、指差し等の直示的指示行為と共に用いることができない、(エ) 指示対象が発話現場に存在する場合だけでなく指示対象が発話現場に存在しない場合にも、話し手はşuを用いることによって自分(話し手)と聞き手との間で指示対象に対して一種の心理的な共感性/共有性を作り出すことができる、(オ) 上記 ア～オ の特徴から(9)のşuの用法も又(1)、(1)"、(2)、(8)で既に見たşuの基本用法から拡張したものである、と言うことが窺われる<sup>15,16</sup>。

以上の考察から、bu、şuの非文脈指示用法に関しては次の結論が導き出される。

- (10) a) bu、şuは「話し手の空間」の対象を指示するのに用いられる。  
 b) buは聞き手が指示対象の存在に気付いていると話し手が判断した場合に、şuは聞き手が指示対象の存在に気付いていないと話し手が判断した場合に用いられる<sup>17</sup>。  
 c) 「話し手の空間」の対象を指示するのに用いられる bu、şuは、指差し等の直示的な指示方法を伴って用いられると言う点で直示性の強い指示詞であると考えられる。  
 d) şuに見られる心理的共感性の含意は上記 c で見た「話し手の空間」の特性の一つである「指差し」と言う指示行為から導き出される帰結の一つである。  
 e) 観念上の対象((9)の例の対象)を指示する場合に用いられる şu の用法は、上記 a～c の特徴を持つ şu の基本用法からの拡張として捉えることができる。

<sup>13</sup> Underhill(1976:121)は、şuの指示対象は視野の中にあり、かつジェスチャーによって指示され得る場所の中にあるべきものであるとしている。

<sup>14</sup> 筆者が事前に行ったインフォーマントチェックによる。

<sup>15</sup> Balpınar(2010a:187-191)では、筆者自身が(9)のような用例は(1)、(1)"、(2)、(8)のような用例からの派生として説明できると言うことに触れている。本稿もBalpınar(2010a)と同じ立場である。しかし、本稿の立場とBalpınar(2010a)の立場の重要な違いは、非文脈指示用法の指示詞の分布を決定する条件として本稿では「話し手による自由なアクセス」及び「話し手による円滑な指示行為の遂行」条件を基盤とする「話し手の空間」を用いるのに対し、後者の立場は「一様性」の条件に基づく「共通の空間」概念を用いると考えている点である。

<sup>16</sup> こうしたşuが指差し等の直示的な指示方法と共に用いられない点に、本節((1)、(1)"、(2)、(8)の例)で見たşuの基本用法から(9)で検討しているşuの用法が派生される段階において、şuの持つ直示性が喪失されてしまうことが起因しているのだろうと筆者は考えている。

<sup>17</sup> (10b)は、bu及びşuの非文脈指示用法に関して、前節のバルプナル(2010b)の(ii)の帰結と同様のものである。又(10c)は、「話し手の空間」概念を用いると言う点で、バルプナル(2010b)の(i)の帰結と異なるものである。

3.2 非「話し手の空間」と*o*の非文脈指示用法

3.1 節では、非文脈指示用法の *bu*、*şu* の分布を決定する、「共通の空間」と言う概念ではまだ十分に説明することができないトルコ語指示詞の現象が存在することを指摘し、それらの現象を説明するに当たって、「話し手の空間」と言う概念が重要な役割を果たしていることを論じた。本節では、*bu*、*şu* の用法だけでなく、*o* の(非文脈指示)用法を説明する上でも「話し手の空間」概念が有効であることを指摘する。

次の(11)–(12)の例をご覧いただきたい。

- (11) (話し手が聞き手と立ち話をしている場面で、聞き手(マルコ)がポケットから取り出した時計に気付く、聞き手に)

Ne güzel saat {*\*bu/\*şu/o*} Marko Paşa  
 何 美しい 時計            それ   マルコ   閣下  
 マルコ閣下、それは何て美しい時計でしょう。(Ögüt 2004:221)

- (12) (友達(Eser さん)が高い壁の上に立っていることに気づき、話し手は友達のエセルさんに)

Eser, ne iş-in var  
 エセルさん、何 仕事-属格人称語尾(2 人称単数) ある  
 {*\*bura/\*şura/ora*}-da?  
                 そこ-位格  
 エセルさん、そこで何をしていますか?(Eldem 2004:468)

(11)では聞き手がポケットから時計を取り出している時に、その様子を見た話し手が、聞き手に属する時計を *o* で指示しているのである。(12)は、話し手(エセルさんの友達)と聞き手(エセルさん)が上下に離れているところにいる場合であるが、話し手から離れた聞き手の居場所を話し手は *ora* で指示している。又、次の(13)の場合、話し手と聞き手が数メートル離れている場面で話し手は聞き手の後ろにいるが、聞き手が遠くにある(小さく見える)村を見ていると言うことに気づき、その村を *o* で指示している。

- (13) (登山の場面で、話し手は聞き手の後ろから、遠くにある村を見ている聞き手に対して)

{*\*bu/\*şu/o*} köy-ün fotoğraf-ı-nı  
                 あの 村-属格 写真-属格人称語尾(3 人称単数)-対格  
 çek-e-yim                          mı?  
 撮る-意志形-1 人称単数 疑問形  
 あの村の写真を撮ろうか?(バルプナル 2010b:18)

これらの用法を前節で述べた「話し手の空間」と言う観点から見てみよう。(11)では時計は話し手の空間からは独立した聞き手の空間にある。(12)では聞き手の居場所は(11)の場合と同様に話し手の空間を含まない聞き手に近い空間と言うことになる。これらの用例に共通している重要な特徴は、聞き手が聞き手自身の関心が一方的に支配している空間内の対象に向けられた話し手による関心に気付いていないと言う点にある。同様に、(13)でも(話し手によって)観察されていると言うことに聞き手が気付いていない。従って、(11)-(13)の場合、指示対象((11)では時計、(12)では聞き手の居場所、(13)では聞き手が見ている風景)は聞き手の関心が一方的に支配している空間(換言すれば話し手の自由なアクセスが制限されている空間)にあると言わざるを得ない。このような場合、話し手による指示対象にかかわる円滑な指示行為の遂行が聞き手の認識状態により制限されているため、(11)-(13)の指示対象は「話し手の空間」にないものとして見るができる。このように考えるなら、非「話し手の空間」は次のように定義することができるだろう。

(14) 非「話し手の空間」: 話し手による自由なアクセス(利用)が制限されており、従って話し手による指示対象にかかわる円滑な指示行為の遂行が期待できない空間。

上の(11)-(13)では、聞き手が対象の存在に気付いている(又は指さし等の直示的手段を用いなくても聞き手がその存在に容易に気付く)と話し手が判断した指示対象が非「話し手の空間」に存在する場合oが用いられることを見た。こうしたoの用法は2節で見たバルプナル(2010b)が言うo<sub>1</sub>の用法に相当するものであると言えよう。一方、oは聞き手が指示対象の存在に気付いていないと話し手が判断した場合にも用いられる(バルプナル(2010b)が言うo<sub>2</sub>の用法に相当する)。(15)をご覧いただきたい。

(15) a. (話し手は遠い山脈のふもとにある小さく見える村を指さしてその村の方向を見ていない隣にいる聞き手に)

Bak! { \*bura/\*şura/ora }-da bir köy var uzak-ta.

見ろ あそこ-位格 一 村 ある 遠いところ-位格

見て!あそこに村があるよ、遠くの方けど。

(Tecer 2009:95(一部改変))

b. (登山の場面で、話し手は雲でぼんやりとしか見えない遠くにある居住地に気づくが、そこがイズミット県なのか確信を持ってないので、指さしながら隣にいる居住地に気付いていない聞き手に聞く)

Pek net gör-ün-mü-yor ama...

あまり くっきり 見る-再帰形-否定形-現在形 けど

{ \*burası/\*?şurası/orası } İzmit değil mi?

あそこ イズミット ではない 疑問形

あまりくつきり見えないけど、あそこはイズミットじゃないか?

(Jansky 1943:97(一部改変))

「話し手の空間」の観点からこの用例を見た場合、(15a)及び(15b)では指示対象((15a)の村、(15b)の居住地)はいずれも話し手にとって非「話し手の空間」内にあると考えることができる。それは、話し手による指示対象にかかわる自由なアクセスと円滑な指示行為の遂行が(15a)の場合は距離的に、(15b)の場合距離的かつ(雲が障害になるため)物理的に制限されている(と話し手が判断する)からである(注11参照)。

「話し手による自由なアクセス」と「話し手による円滑の指示行為の遂行」条件を基盤とする「話し手の空間」の考え方が基本的に正しいと言うことは、指示対象が話し手にとって特定不可能である次のようなデータからも確認できる。

(16) (テーブルの上に、手を伸ばせば、手に持つことができる距離に箱があるとする。この場面において、いきなり箱の中で何かが動き出し始める時、その中にある目に見えないものを指示して)

Aman tanrı-m!                              {?bu/\*şu/o} da ne!<sup>18</sup>

おお 神-属格人称語尾(1人称単数)          これ っ て 何

おお神よ!一体これって何なんだ! (Balpmar 2010a:185)

(17) (王様が森の奥深いところで兵士たちと一緒に狩をしている場面である。そこで、突然確認できないほど速いスピードで、ある物体が遠くから目の前を通っていく。王様は隣にいる兵に。)

王様: Ne-ydi          {\*bu/\*şu/o}?

何-過去形          あれ

あれは何なんだ?

兵卒: Etraf-ı-nı                              sar-dı-k.

周囲-属格人称語尾(3人称単数)-対格      囲む-過去形-1人称複数

(あいつの)周りを包围致しました。(バルプナル 2010b:23)

(18) (部屋の中の人がノックの音に対して)

Kim {\*bu/\*şu/o}?

誰          あれ

(直訳)あれは、誰? (金水(他)2002:242、fn.7) ({}内の表示は筆者による)

<sup>18</sup> この場合、bu も用いられるとする母語話者が存在する。しかし、その場合、bu で言及されるものは箱そのものであり、箱の中のものではないと筆者は考えている。

(16)-(18)のoの用法を「話し手の空間」と言う観点から見た場合、指示対象((16)では箱の中のもの、(17)では目に見えないもの、(18)ではドアの向こうにいる聞き手)は話し手によって特定できないため、これらの指示対象は話し手の円滑な指示行為の遂行が認知的に制限されている空間にあると考えることができる。又、(18)では指示対象(ドアの向こうにいる聞き手)が話し手と独立した「ドアの向こう」と言う空間に存在しており、話し手の対象へのアクセスが物理的に制限されていると考えられる。従って、(16)-(18)の指示対象は「話し手の空間」内に存在しない対象として見るることができるのである。更に、これらの例を「聞き手による認識」と言う観点から見た場合、(16)では生き物らしいものの動き、(17)では確認できない物体が目の前を歩いていく動き、(18)ではノックの音、と言う非言語的情報から聞き手がその対象に気付いていると考えることができる。

以上、(11)-(18)のデータからoの用法に関しては次の結論が導き出される。

- (19) a) oは、bu及びşuと異なり、非「話し手の空間」の対象を指示するのに用いられる。  
 b) oは、bu及びşuと異なり、聞き手が指示対象の存在に気付いていると話し手が判断した場合にも、まだ気付いていないと話し手が判断した場合にも用いられる(気付いている場合 o<sub>1</sub>、気付いていない場合 o<sub>2</sub>)<sup>19</sup>。

(19)の一般化が基本的に正しいと言うことは、以下の例から見てとることができる。

(20) (場面設定は(9)の場合と同様)

Git	biz-e	kalleşlik	yap-mış	ol-an
行け(命令形)	我々-与格	裏切り	する-完了形	なる-連体形
{*bu/*?şu/o}	Efraim-e	bir	soruştur	bu Yakup
	あの エフライム-与格	一	たずねる	この ヤークupp
de-n-en	adam-ı			
言う-受身形-連体形	男-対格			

我々を裏切ったあのエフライムのところに行って、このヤークuppと言う男の  
 ことをちょっと訊いてみる。Eldem (2004:65(一部改変))

(20)は場面設定が(9)とやや異なって、指示対象(Efraim)のことを好ましくない相手と話し手が判断した場合である。このような場合、話し手による指示対象(Efraim)にかかわる自由なアクセスと円滑な指示行為の遂行が話し手の心理的状态により制限されていると考えることができる。従って、指示対象(Efraim)は非「話し手の空間」に存在する対象として見るることができるのである。又「聞き手による認識」と言う観点から見た場合、(20)の文が発話される前の段階

<sup>19</sup> (19b)は、oの非文脈指示用法に関して、2節で見たバルブナル(2010b)の(ii)の帰結と同様のものである。



で Efraim が対話者たちの間で話題にされていないのだから、(9)の場合と同じ理由で、聞き手がまだ Efraim の存在に気付いていないと考えても差し支えない。このように考えるならば、我々の仮説体系から言えば、Efraim を指示するのに *o* が選択されるはずである。実際には、(20)では指示対象は *o*(*o*<sub>2</sub>)で指示されている<sup>20</sup>。又、前節で見た(1)'の例では、話し手による指示対象(毛糸玉)にかかわる自由なアクセス(利用)が聞き手の一方的な関心によって制限されており、従って話し手による指示対象(毛糸玉)にかかわる円滑な指示行為の遂行が期待できない空間(非「話し手の空間」)にあると考えることができる。この場合、聞き手が対象(毛糸玉)の存在に既に気付いている(と話し手が判断した場合に相当する)のだから、(19)で述べた仮設では *o*(*o*<sub>1</sub>)が選択されることが正しく予測される。

さて、前節では「話し手の空間」の指示詞 *bu*、*şu* は指示対象に対する話し手の心理的共感性/共有性を含意することを見てきた。一方、こうした指差しの機能を利用した指示対象に対する心理的共感性/共有性の達成は非「話し手の空間」の指示詞 *o* には求めることができないことは言うまでもない<sup>21</sup>。それは、*o* の使用条件である非「話し手の空間」性は指示対象の指示に当たって、*bu* 及び *şu* の用法と異なり、指さし等の直示的な指示方法とは原則的になじむものではないからである。この予測が正しいことは、(11)-(13)の指示詞 *o*<sub>1</sub> が指差し等の非言語的・直示的指示方法と共に用いられた場合、その使用が極めて不適切なものになってしまうことから分かる。又、(15)-(20)の *o*<sub>2</sub> の場合にも、指差し等の非言語的・直示的指示方法だけでは不十分であり、((15)及び(20)の例で見た)破線で示された言語限定表現(言語的補助)の使用が必要になる。従って、*o* 系列指示詞(*o*<sub>1</sub>、*o*<sub>2</sub>)は共に直示性が弱い指示詞であると言うことができる。このように考えるなら、*o* 系列指示詞が対象に対する話し手の心理的共感性/共有性を含意しないと言う特徴は、*o*(*o*<sub>1</sub>、*o*<sub>2</sub>)が非「話し手の空間」の指示詞であり、従って直示性の弱い指示詞であることの帰結として捉えることができる(バルプナル 2010b、2012 参照)。

#### 4. まとめ

バルプナル(2010b)では、非文脈指示用法の *bu*、*şu*、*o* の分布は、「共通の空間」及び「聞き手による認識」と言う概念に基づいて決定されると言うことを論じた。本稿では、この2つの概念のうち「共通の空間」と言う概念では十分に捉えることができないトルコ語指示詞のデータが存在することを指摘し、それらのデータを説明するためには (i) 「話し手の空間」と言う概念が有効であること、(ii) *bu*、*şu* は「話し手の空間」の対象を、*o* は非「話し手の空間」の対象を指示するのに用いられること、(iii) *bu* は聞き手が対象の存在に気付いている(と話し手が

<sup>20</sup> (20)では、指示対象(Efraim)の指示に当たって、話し手は Efraim のことを好ましい/親しい相手と見做している場合((9)の場合) *şu* を用い、好ましくない/親しくない相手と見做している場合((20)の場合) *o* を用いる。このことから、我々は指示詞の選択及びその背後にある「話し手の空間」の概念が特定の状況に機械的に対応しているわけではなく、そこに言語外の要因(指示対象に対する話し手の認識状態の変化)も入り込んでいることを見てとることができる。こうした言語外の要因をどのように我々の仮説体系の中へ組み入れるかについては、本稿の範囲を超える事柄であり、今後更に検討したい。

<sup>21</sup> *o* 系列指示詞における心理的共感性/共有性の不在については Balpınar(2010a)、バルプナル(2010b)を参照にしてください。

判断する)場合に、*şu* は聞き手が対象の存在に気付いていない場合に用いられ、一方 *o* は聞き手が対象の存在に気付いている場合(表2や次の表3の *o*<sub>1</sub>の場合)だけでなく気付いていない場合(表2や表3の *o*<sub>2</sub>の場合)にも用いられること(バルプナル 2010b)、(iv) *şu* に見られる指示対象に対する話し手の側がの心理的共感性/共有性の含意は「話し手の空間」の特性の一つである「指差し」と言う指示行為から導き出される帰結の一つであることを論じた。

以上の考察は表3のようにまとめられる。

表3 現代トルコ語における非文脈指示用法の指示詞の体系

	話し手の空間		
		+	-
聞き手による認識			
+		<i>bu</i> ①	<i>o</i> <sub>1</sub> ③
-		<i>şu</i> ②	<i>o</i> <sub>2</sub> ④

(①は用例(4)-(6)に;②は用例(1)、(1)′、(2)、(8)、(9)に;③は用例(1)′、(11)-(13)、(16)-(18)に;④は(15)、(20)に相当する)

参考文献

飯沼英三(1995)『トルコ語基礎』ベスト社。  
 金水敏・岡崎友子・曹美庚(2002)「指示語の歴史的・対照言語学的研究—日本語・韓国語・トルコ語」『シリーズ言語科学4 対照言語学』:217-247. 東京大学出版会。  
 西岡いずみ(2006)『現代チュルク諸語の指示詞の研究』九州大学大学院平成17年度博士論文。  
 林徹(1985)「トルコ語の指示詞」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信53』:55-57. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。  
 林徹(1989)「トルコ語のすすめ3-「これ・それ・あれ」あれこれ」『言語18-1』:96-101. 大修館書店。  
 林徹(2008)「トルコ語の指示詞*şu*の特徴」『東京大学言語学論集』27:217-232. 東京大学文学部言語学研究室。  
 Balpınar, Metin (2010a)「トルコ語の指示詞-“*şu*”系列指示詞の機能を中心に-」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』29:179-198. 岡山大学大学院社会文化科学研究科。  
 バルプナル、メティン(2010b)「現代トルコ語における“*o*”系列指示詞の特徴について-直示用法を中心に-」『東京大学言語学論集』30:9-26. 東京大学文学部言語学研究室。  
 バルプナル、メティン(2011)「トルコ語指示詞の文脈指示用法について-文照応形としての*bu*, *o*の用法-」『京都大学言語学研究』30:71-105. 京都大学大学院文学研究科言語学研究室  
 バルプナル、メティン(2012)「トルコ語指示詞における非文脈指示用法と文脈指示用法について-文脈指示用法を中心に-」『アジア・アフリカ言語文化研究』83:89-116. 東京外国語

大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

- Banguoğlu, Tahsin (1959 [2004<sup>7</sup>]) *Türkçe'nin Grameri*. Türk Dil Kurumu.
- Eldem, Burak (2004) *Seni Tılsımlar Korur*. İnkılâp Kitabevi.
- Ergin, Muharrem (2002) *Türk Dil Bilgisi*. İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Yayınları.
- Jansky, Herbert (1943) *Lehrbuch der Türkischen Sprache*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Kissling, Hans Joachim (1960) *Osmanisch-Türkische Grammatik*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Lewis, G. L. (1967) *Turkish grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Öğüt, T. Yılmaz (2004) *100 Diyalog*. Mitos Boyut Yayınları.
- Peters, Ludwig (1947) *Grammatik der Türkischen Sprache*. Berlin: Axel Juncker Verlag.
- Tecer, Ahmet Kutsi (2009) *Bütün Şiirleri*. Bilge Kültür Sanat.
- Underhill, Robert (1976) *Turkish Grammar*. Cambridge: MIT Press.

## Re-examination of the Non-text Dependent Use of Turkish Demonstratives

BALPINAR, Metin

**Keywords:** Turkish, Demonstratives, Non-Text Dependent Use, Speaker's Space,  
Recognition by the Hearer

### Abstract

In Balpinar (2010b), the distribution of Turkish demonstratives has been analyzed from the viewpoints of “shared space” and “recognition by the hearer”. In this paper, it is pointed out that Turkish demonstratives show phenomena which cannot be properly dealt with the concept “shared space”, and argued that the notion of “speaker's space” will be an efficient way to deal with the phenomena. Among others, the following points are argued: (1) while *bu* and *şu* are used to refer to an object within the “speaker's space”, *o* is used to refer to an object that remains outside the “speaker's space”, (2) The implication of psychological affinity to the referred object on the part of the speaker which accompanies the use of *şu* series demonstratives is a consequence of the bare deictic signal such as “pointing”, one of the properties of the notion of “speaker's space”.

(バルプナル・メティン メフメット・アーキフ・エルソイ大学 助教授)